

## キルケゴールにおけるヒューマンイズムの問題

須藤孝也(大谷大学)

キルケゴールの思想をヒューマンイズムの思想と見なすことは可能か。可能であるとすれば、どのような意味で可能なのか。この問いについて、今一度考察を加えることが本発表の目的である。

周知のように、キルケゴール思想は、決定的にキリスト教信仰に依拠しながら構築されており、もし我々がヒューマンイズムを、信仰と理性を対立的に捉えながら、理性の側に人間本質を想定し、それに価値を置こうとする思想と定義するならば、それとは全く異質のものである。

とはいえ、キルケゴールが哲学的に解釈しうる著作を残し、また多くの思想家の哲学的思考を刺激してきたこともまた事実である。キルケゴールが「哲学史」の本で取り上げられたり、大学の哲学科の授業で取り上げられたりすることは、ごくありふれたことであり、我々はそうしたことに驚かない。

キルケゴールが書き残した様々なテキストを哲学的テキストと宗教的テキストに区分し、前者だけを哲学のフィールドでとりあげ、そこにヒューマンイズムの思想を見出すことも、一見すると可能に見える。

しかしことはそれほど単純ではない。というのも、キルケゴールは、前期からすでに哲学的著作と並行して、キリスト教的著作を出版していたため、ある時期のキルケゴールに「宗教的転回」を認め、それ以降に出版された著作のみを宗教的著作と見なすことはできないということがあるからである。彼の日記には『あれかこれか』からすでに、読者を「真のキリスト教信仰」へ導くという意図を持って出版していたことが記されている。後期の著作や出版物もまた、信徒とキリスト教、およびキリスト教会との関係に切り込むものであったことからすれば、むしろキルケゴールの著作活動の全体を読者の「教化」を目的するものと解する方が自然である。

そして、同時に出版された哲学的著作とキリスト教的著作が完全に独立したものとではなく、意図的に関連づけられながら出版されていたことも、従来の研究が指摘してきた通りである。『畏れとおののき』だけでなく『哲学的断片』や『哲学的断片への後書き』、『不安の概念』や『死に至る病』といった一連の著作もまた、キリスト教の主題について論じたものであり、たとえそれらをキリスト教の文脈から切り離して、哲学的著作と見なすとしても、それはキルケゴールの意図を離れて行われるのであり、それは、キルケゴールがヒューマンイズムの思想家であるかどうか、という問いに答えるためになされる研究とは別のものである。

また明確しておかなければならないのは、キルケゴールの主題はキリスト教、なかんずくデンマーク・プロテスタンティズムであって、一般概念としての「宗教」ではなかったことである。確かにキルケゴールは、実存段階説において、一般宗教性としての「宗教性 A」と、キリスト教を意味する逆説の「宗教性 B」とを区別し、両者の特徴づけた。しかしこれは、普遍的な人間理解を目指して行われたものではなく、むしろある種のキリスト教信仰のあり方を「真の」キリスト教信仰のあり方から区別し、これを批判し、さらなる発展へと鼓舞する意図のもとで書かれたものであった。この意味で、キルケゴールのうちに、人間論としての「宗教性」の理解を見出すことも困難であり、またもし仮に見出されたとしても、

そこからキルケゴールをヒューマンイズムの思想家と見なすことが帰結するわけでもない。

こうした事情を踏まえながら、本発表が集中的に考察を加えるのは、キルケゴールの著作には、超越や逆説のキリスト教の見地から、人間性を否定的に捉える議論が見られる一方で、同時に、人間性を肯定的に捉える議論も見いだされることである。この区分は、上の哲学的著作と宗教的著作の区分と一致しない。キリスト教的著作において、人間性の肯定と否定の両方が見られるだけでなく、哲学的著作においてもそれらの両方が見られるのである。

とはいえ、この人間性の肯定は、自然的人間性の肯定ではない。むしろ「真の」キリスト教信仰のうちではじめて達成される、「ある種の」人間性の肯定である。この意味で、キルケゴールにヒューマンイズムを見出すとしても、それは「キリスト教ヒューマンイズム」と呼ぶべきものであろう。そしてまたそのようなヒューマンイズムは、ヒューマンイズムを普遍的な人間性の肯定と理解する場合には、どういヒューマンイズムとは呼べない類のものである。

キルケゴール研究の歴史を振り返れば、ヨハネス・スレークやアーノルド・B・コムなどが、キルケゴールをヒューマンイズムの思想家と見なす解釈を提示してきた。こうした解釈は珍しいものではなく、現代においても、キルケゴール研究を牽引する一人であるアーネ・グロンなどがこの系譜に属する解釈を行なっている。彼らの主張するところによれば、キルケゴールは、「人間本質」を洞察してみせた思想家である。たとえその思想がキリスト教色の濃いものであったとしても、やはりそこで示された人間理解は、どの人間にも普遍的に妥当するものである。

本発表では、気鋭のキルケゴール研究者の一人であるクラウディア・ウェルツが最近発表した *Humanity in God's Image* (2016年) で展開した議論についても参照したい。先述のアーネ・グロンのもとでキルケゴールを研究してきた彼女は、現代哲学や現象学にも精通し、エマニュエル・レヴィナスとキルケゴールの比較研究によっても、大きな成果を挙げた。本書の中で彼女は、「神との似姿」を語る系譜を後付け、その中でキルケゴールを解釈して見せる。確かに、彼女が使ったキーワードは *humanity* であって *humanism* ではない。しかしキルケゴール思想のうちに、普遍人間性に関する語りとその肯定が含まれているかどうか注目する本発表の主題と深く関わる。

こうした一連の議論は、単に、キリスト教ヨーロッパの覇権に酔ってこれを普遍的と見なす、「キリスト教中心主義的」解釈にすぎないのであろうか。本発表においては、当該の問題に関してこれまで提示された従来の主だった解釈に対して検討を加えながら、この問題について考察を加えたい。

最後に付言するならば、本研究は、キルケゴールと啓蒙の関係について解明を目指すプロジェクトの一部をなしている。それは、両者を繋ぐ媒介項の一つとしてのヒューマンイズムに着目することで、キルケゴール思想を哲学史のうちに正確に位置付ける際の参照点をなす。すなわちこれは、啓蒙哲学の基礎づけの作業そのものではないし、またヒューマンイズムの基礎づけの作業でもない。また、キリスト教思想による啓蒙やヒューマンイズムの超克を目指すものではない。そうした「結論」のもと手前で、ヒューマンイズムをキーワードに再検討することで、キルケゴール思想において賭けられていたものは何か、その一旦を明らかにすることがここでの目標である。